

ダニエルの書 - 第八十七番

十人のおとめのたとえを解き明かす：アドベンチストの歴史をたどる深遠な旅

Jeff Pippenger

2024-02-20

十人の乙女のたとえは、アドベンチストの人々の経験を示している。

「マタイ25章の十人の乙女のたとえは、アドベンチストの人々の経験も示している。」『大いなる論争』393。

ミレライト派のアドベンチストたちは、そのたとえ話を一字一句違わず成就した。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

第一の天使の運動の歴史は第三の天使の運動を表しており、このたとえ話の最終的な焦点は、乙女たちが油を備えているかどうかであり、その油は後の雨のメッセージである。

不義と欺きと迷妄のうち、死の陰そのものの中に横たわっている世界がある—眠っている、眠っている。彼らを目覚めさせるために魂の産みの苦しみを覚えているのは誰か。どのような声なら彼らに届くのか。私の思いは、合図が与えられるあの未来の時へと運ばれる。「見よ、花婿が来られる。迎えに出なさい。」しかし、自分のともしびに注ぎ足す油を求めるのを遅らせた者たちがいて、手遅れになってから、油が象徴する品性は人から人へ移すことのできないものだと知るだろう。その油とはキリストの義である。それは品性を表しており、品性は譲り渡すことができない。誰も他者のためにそれを確保することはできない。各人が自らのために、罪のあらゆる汚れから清められた品性を得なければならない。バイブル・エコー、1896年5月4日。

たとえにおける「油」は「品性」および「キリストの義」を表しています。聖められた品性は、神の御言葉を食する者によってのみ生み出されます。

彼らをあなたの真理によって聖めてください。あなたのみことばは真理です。ヨハネ 17:17。

「油」は神の霊からのメッセージでもある。

神が私たちに送ってくださる知らせを受け入れないとき、神の御名は辱められる。このようにして、私たちは、闇の中にいる人々へ伝えられるために神が私たちの魂に注ぎ込もうとしておられる黄金の油を拒んでしまう。レビュー・アンド・ヘラルド、1897年7月20日。

「油」とは、キリストの義の聖化の御臨在を伝える神の御言葉のメッセージのことである。十人の乙女のたとえ（これはハバクク書2章の預言でもある）において、真夜中の叫びのメッセージ、すなわちキリストの義のメッセージは、1888年の反乱におけるジョーンズとワグナーのメッセージによって表されている。

主はその大いなるあわれみによって、ワグナー長老とジョーンズ長老を通して、ご自分の民にきわめて尊いメッセージをお送りになった。このメッセージは、世の前に、掲げられた救い主、すなわち全世界の罪のためのいけにえを、いっそう明確に示すためのものであった。これは、保証者なる方を信じる信仰による義認を掲げ、神のすべての戒めへの従順のうちに現されるキリストの義を受け取るよう、人々を招いた。多くの者はイエスを見失っていた。彼らは、その神なるお方ご自身、その功績、そして人類に対する変わらぬ愛に目を向け直す必要があった。すべての力は主の御手にゆだねられており、主は人々に豊かな賜物を分け与え、無力な人間にご自身の義というかけがえのない賜物を授けるのである。これこそ、神が世に与えるよう命じられたメッセージである。これは第三天使のメッセージであり、大声で宣べ伝えられ、豊かな御霊の注ぎを伴って示されるべきものである。Testimonies to Ministers, 91.

そのメッセージは後の雨のメッセージである。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

2001年9月11日に力ある御使いが降りて来たとき、後の雨が降り注ぎ始め、十人の乙女のたとえとハバクク書2章によって表されているミラー派の歴史が繰り返され始めた。その時、終わりの時代の神の民は天使の手にあった書物を食べ、それによってエレミヤ書の古い道へと導き戻され、こうして警告のラッパを吹き鳴らす見張り人となった。そのラッパの警告は、イザヤによって大いなる叫びとして表されたラオデキヤのメッセージであった。

声を限りに叫べ、ためらうな。ラッパのようにあなたの声を上げ、わたしの民にその背きを、ヤコブの家にその罪を告げよ。イザヤ書58章1節。

第一と第三の天使の改革運動は「終わりの時」に始まる。その時点で「知識の増加」が起こるが、その知識が体系化されたメッセージとして公表された後にのみ、その時代に生きる世代を試す。その後、その体系化されたメッセージは「権威づけられ」、その権威づけは天使の降臨によって印される。天使の降臨はハバククの論争を明らかにし、二つの陣営が現れて、それぞれが「後の雨」の真のメッセージか偽のメッセージのいずれかを標榜し始める。すると忠実な者たちは神の見張り人となり、警告のラッパのメッセージを吹き鳴らし始める。

真のラッパのメッセージは、ハバククの二枚の板に示された光に基づいている。それはラオデキヤへの警告であり、神の民の罪を明らかにする警告である。議論は最初の失望に至るまで激化し、そのとき一方のグループは「あざける者の会衆」となり、真の見張り人たちは、失望以前に示していたそのメッセージへの熱心に立ち返るよう召される。見張り人たちが戻ると、自分たちが「遅延の時」にいること、そして失敗したと見なされていたメッセージは実際には神の秩序において成就するのだということを確認した。そのメ

メッセージは短い期間（とはいえ期間は期間だが）のうちに展開され、そしてそのメッセージが到来すると、それは「真夜中の叫び」のメッセージとして表されるが、それは単に、御使いが降ってカづけられ始めたメッセージのいっそうの増大にすぎない。

そのメッセージの到来に際して、天使の降臨の際に見張り人としての務めを受け入れた者たちと、それを拒んだ者たちとの間の分離が完全に成就した。その分離は、天使が降臨したときに始まった後の雨に課せられていた「測り」のない後の雨の注ぎ出しに先立って、十四万四千人の上に印が押される時点を示している。

ミラー派の歴史は、十四万四千人の封印の期間における後の雨の例証である。その歴史において、ハバククに関する論争は、真の後の雨のメッセージと偽の後の雨のメッセージに基づいていた。パウロは、一方を真理を愛する者たち、他方を、真理を愛していないため、また「偽り」を信じたゆえに強い惑わしを受ける者たちとして区別している。

ミラー派運動は、「終わりの時」から「真夜中の叫び」における聖霊の注ぎに至るまで、知識と力において増し加わっていく真理の発展を表している。ミラー派運動は、相互に対応する特定の道標を識別した。たとえば、「終わりの時」、「知識の増加」によって表されるメッセージの「形式化」、天使の降臨によって標示されるメッセージの「カづけ」、十人の乙女のたとえを導入する「第一の失望」、「真夜中の叫び」として表される聖霊の注ぎ、そして最後の「第二の失望」であり、そこで経綸上の戸が「閉じられ」別の経綸上の戸が「開かれる」。

神は、黙示録14章のメッセージに預言の系列の中での位置をお与えになり、その働きはこの地上の歴史が閉じるまでやむことはない。第一と第二の天使のメッセージは今の時代においても依然として真理であり、これに続くものと並行して進むべきである。第三の天使は大声でその警告を告げる。「これらのことの後に」とヨハネは言った。「私は天から下ってくる、偉大な力を持つ別の天使を見た。地はその栄光によって照らされた。」この輝きにおいて、三つのメッセージすべての光が結び合わされている。『1888年の資料』804頁。

十四万四千人の運動を象徴するミラー派運動は、ダニエル書8章13節と14節の二千三百年と二千五百二十年の予言に深く関わっていた。「終わりの時」は、イスラエルの北王国に対する神の憤りの「七つの時」が終結したときに到来した。1831年にミラーのメッセージが体系化されたのは、欽定訳聖書が刊行されてから二百二十年後であった。

「ミラー氏は、他の国々でこのメッセージに促されて行動した人々と同様に、まず新聞紙上や小冊子で執筆・公表することで自らの使命を果たそうと考えた。彼は最初に、自身の見解を、バーモント州ブランソンで印刷されていたバプテスト派の新聞『バーモント・テレグラフ』に発表した。これは1831年のことである。」 John Loughborough, *The Great Second Advent Movement*, 120.

第三の天使の「終わりの時」運動は、1863年の反乱から百二十六年が満了した1989年に到来した。「百二十六」は「七つの時」の象徴である。両方の運動は、「七つの時」の成就から始まった。

第三天使の運動のメッセージは、Our Firm Foundation という雑誌に『終わりの時』と題した一連の記事が掲載されることによって、1996年に確立された。これらの記事が掲載されたのは、1776年の独立宣言から二百二十年後であった。両方の運動のメッセージは、その二百二十年の終わりに到来したメッセージと直接結びつく歴史から二百二十年後に確立された。

「二百二十」という数は、紀元前677年に始まった南王国ユダに対する神の憤りの「七つの時」と、紀元前457年に始まるダニエル書8章14節の二千三百年との間の結びつき（リンク）を表している。二百二十という数はこの二つの預言を結び合わせ、そしてその二つの預言は、アドベンチズムの基礎となる章句であるダニエル書8章13節と14節において共に提示された。その節々でキリストは預言的に自らを「ある聖者」として示しており、これはヘブライ語の「Palmoni」の訳で、「驚くべき数を数える者」を意味する。

「驚くべき数を数える者」は、二つの預言の系統を表す二つの幻を提示しており、それはホワイト姉妹がアドベンチズムの中心的な柱であると特定した、まさにその二つの節において示されている。起点は、1844年にそれらが成就する時点へと、象徴的な二百二十年という結び付けで結ばれている。ハバクク書第二章は二十節で締めくくられており、こうして「驚くべき数を数える者」は、別の表現によって「二百二十」という数に印を付けることになる。というのも、その節は、その年に始まった反型の大贖罪日の主要な特徴を示しているからである。

しかし、主はその聖なる宮におられる。全地よ、その御前に沈黙せよ。ハバクク書2章20節。

アドベンチズムの中心的な柱をなす二つの預言期間は、「驚くべき数え手」によって直接示され、二百二十年によって互いに結び付けられている。そして、いつも物事の終わりをその始まりと同一視するイエス（「驚くべき数え手」）は、1844年10月22日に、二百二十という数でそれらの終わりに印を付けた。

第一の天使の運動は、第三の天使の運動と同様に、「終わりの時」（それぞれ1798年と1989年）に始まり、そこでレビ記二十六章の「七つの時」が特定される。両方の歴史における次の道標は、220年の終結によって示されるが、これは「七つの時」の預言的特徴でもある。というのも、二つの幻（chazon と mareh）の起点が、それらを結び付ける220年の期間を表しているからである。

1611年の欽定訳聖書の出版、バーモント・テレグラフ紙に掲載されたミラーのメッセージの公式化、独立宣言の発表、そして『Our Firm Foundation』誌における『The Time of the End』の掲載は、いずれも出版物であった。両方の二百二十年の期間の始まりと終わりは、歴史的な道標として、いずれも出版物を示している。「二百二十」という数は預言的な連関の象徴であり、四つの出版物は、出版物であるという共通性によって、またそれぞれの歴史において「知識の増加」として表されるメッセージによっても結びついている。

1611年の聖書は、福音が天の宮廷から人類へ伝えられることを表している。ミラーのメッセージは時の預言の文脈の中に置かれていたし、ハバククの二つの聖なる図表は、ミラ

一のメッセージが歴史の線によって図示されていることを容易にわからせる。「バーモント」は「緑の山」を意味し、靈感によれば「緑」は信仰の象徴である。

この夢は私に希望を与えた。私には、緑のひもは信仰を象徴していた。そして、神を信頼することの美しさと単純さが私の魂に夜明けのように差し込み始めた。Christian Experience and Teachings, 28.

ミラーのメッセージは正式にまとめられ、忠実な教会から伝えられた。なぜなら、終わりの日における「山」は「教会」を意味するからである。

終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、丘々よりも高くそびえ、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山へ、ヤコブの神の家へ登ろう。主はその道を私たちに教え、私たちはその道筋を歩もう。律法はシオンから出、主のことばはエルサレムから出るからだ。」イザヤ書 2:2, 3.

ミラーの正式に定式化された試練のメッセージは忠実な教会から出た。そして「The Telegraph」と呼ばれる出版物は、欽定訳聖書がそうであったように、天からのメッセージを表している。というのも、二つのギリシャ語から成る「telegraph」という語は「遠くからのメッセージ」を意味するからである。最初の語（tele）は「遠い、離れた」を意味し、二番目の語（grapho）は「書く、記録する」を意味する。合わせると「遠隔で書く、または伝える」という意味になる。1611年、神は欽定訳聖書の制作を通して天からのご自分のメッセージを伝えられ、そして二百二十年の終わりにあたる1831年に「The Vermont Telegraph」で初めて正式に定式化されたミラーのメッセージもまた、天からの神のメッセージを伝えた。そのメッセージは、1798年の「終わりの時」に開かれた「知識の増加」であり、それがその世代に三段階からなる試練の過程をもたらした。その歴史は「Future for America」の歴史の型となった。

1776年の独立宣言は、黙示録13章の地の獣の始まりを表している。それはアメリカ合衆国の始まりを表しており、そうすることによって、合衆国の終わりにおける独立の制限を示している。『Future for America』のメッセージは（その名が示すとおり）、独立宣言の公布という始まりにおいて型として示されている結末を明らかにする。それから220年後の1996年、『The Time of the End』誌を発行していたミニストリーは、それ以前に『Future for America』と名付けられていた法人を引き継いだ。その年、『Our Firm Foundation』と呼ばれる刊行物に掲載されていた記事で構成された『The Time of the End』誌が発行された。

「Future for America」というミニストリーの名称は、独立宣言の歴史に言及している。というのも、その文書がアメリカ合衆国の始まりを画し、イエスは常に終わりを初めによって示されるからである。Future for America の刊行物の題名は「終わりの時」であり、1989年の「終わりの時」だけでなく、ミカエルが立ち上がる時に恩恵期間が終わることも扱っている。同刊行物で定式化されたメッセージ（ダニエル書11章40～45節）は、1989年（終わりの時）のソ連崩壊によって封印が解かれ、解かれたこれらの節は、1989年から12章1節に至るまでの歴史の展開を順に示し、そこではミカエルが立ち上がり、人類の恩恵期間が閉じられることが示されている。

1776年の独立宣言の発表から『The Time of the End』誌の刊行に至るまでの期間は二百二十年に当たり、その始まりと終わりは同じ預言的テーマを取り扱っている。『The Time of the End』は、もともと『Our Firm Foundation』誌に記事として初出された章をまとめて編纂したものであり、ミラー派運動の基礎的真理（すなわち「私たちの堅固な土台」）に立脚しなければ、1989年の「時の終わり」における「知識の増加」を理解することは不可能である、という預言的真理を示している。

「終わりの時」として表される道しるべと、第一の天使の運動と第三の天使の運動の並行する歴史においてメッセージの「形式化」を表す道しるべは、いずれもレビ記二十六章の「七つの時」という予言的要素を含んでいる。並行する歴史における次の道しるべは、1840年8月11日の黙示録10章の天使の降下、または2001年9月11日の黙示録18章の天使の降下によって示される、メッセージの力づけである。黙示録9章の第二のわざわいの成就是黙示録10章の天使を降下させ、黙示録10章の第三のわざわいの成就是黙示録18章の天使を降下させた。

並行する歴史においては、天使が下ってくる時点で、後の雨が「ぱらつき」始める。その時点で、そのメッセージは、予言された出来事の成就が確認されることによって「力づけられる」。ミラー派にとっては、それは、黙示録9章15節の第二の災いに関するイスラムの時の預言の成就としての、オスマン帝国の覇権の終結であった。十四万四千の運動にとっては、それは「国々を怒らせること」であり、黙示録10章7節にある第七のラッパの時に属する、第三の災いに関するイスラムの預言で、ニューヨーク市の巨大な建物が倒壊したときに成就した。

並行する歴史の主要な道標それぞれは、「驚くべき数え手」の御業と直接結びついている。この方は、二千三百年と二千五百二十年を表す二つの幻の関係に、ご自身の印を押される。天使の降臨に際して起こされた預言的な見張り人たちは、警告のラッパを吹き鳴らす。その中にはラオデキアへのメッセージが含まれており、それは1856年に「七つの時」のより大いなる光の封印が解かれたことと直接結びついていた。ハバククの「二枚の板」という道標は、1843年と1850年の先駆者の図表によって表され、どちらも「七つの時」を図示しているが、それはそれぞれの並行する歴史において、天使の降臨と「最初の失望」の間に現れた。

「遅延の時」という道標は、1843年の失敗した予言と直接結びついており、その予言は二千三百年と二千五百二十年の双方の成就に関するものであった。「真夜中の叫び」のメッセージは、それら二つの預言的期間が間もなく成就することの特定であった。最後の道標における経綸的な「戸」の閉鎖は、それら二つの預言期間の成就を示し、第七、すなわち喜年のラッパが鳴り始める場所を示す。各歴史におけるすべての道標は「七つの時」と直接結びついており、この「七つの時」が両方の歴史を結び合わせる糸を表し、そして両方の歴史は「後の雨」のメッセージを表している。

次回の記事でこの研究を続けます。

「『御言葉につまずき、不従順である人々にとって』キリストはつまずきの石である。だが『家を建てる者たちの退けた石、同じ石が隅のかしら石となった。』退けられた石のように、地上でのご自身の使命において、キリストは無視と侮辱に耐えた。彼は

『人々に侮られ、捨てられ、悲しみの人で、苦しみに通じていた。……彼は侮られ、私たちは彼を尊ばなかった。』イザヤ書 53:3. しかし、やがて彼が栄光を受ける時が近づいていた。死者の中からの復活によって、彼は『力ある神の子』であると宣言される。ローマ人への手紙 1:4. 彼の再臨のときには、天と地の主として現される。今まさに彼を十字架につけようとしている者たちは、彼の偉大さを認めることになる。全宇宙の前で、退けられた石は隅のかしら石となる。」

そして、「それが誰の上に落ちかかっても、その人を粉みじんに打ち砕く」。キリストを拒んだ人々は、まもなく自分たちの都と国が滅ぼされるのを見ることになった。彼らの栄光は打ち砕かれ、風の前の塵のように散らされた。では、ユダヤ人を滅ぼしたのは何であったのか。それは、もしその上に建てていたなら彼らの安全の拠り所となったはずの岩であった。すなわち、蔑まれた神の慈しみ、退けられた義、軽んじられた憐れみであった。人は神に逆らう道を選び、本来なら彼らの救いとなるはずのすべてが、彼らの滅びへと変えられた。命のために神が定めたすべては、彼らには死となった。ユダヤ人がキリストを十字架につけたことのうちに、エルサレムの滅亡がすでにいはまられていた。カルバリーで流された血は、彼らをこの世においても来るべき世においても滅びへと沈める重しであった。同様に、神の恵みを拒む者たちの上に裁きが下る大いなる終わりの日にも、そうなる。彼らのつまずきの石であるキリストは、そのとき彼らには報復の山として現れる。義人には命であるその御顔の輝きが、悪しき者には焼き尽くす火となる。退けられた愛、軽んじられた恵みのゆえに、罪人は滅びる。

「多くのたとえと繰り返される警告によって、イエスは、ユダヤ人が神の御子を退けることの結果がどうなるかを示された。これらの言葉において彼は、あらゆる時代においてご自身を贖い主として受け入れることを拒むすべての人々に語っておられた。すべての警告は彼らに向けられている。汚された神殿、不従順な息子、不忠実な農夫、軽んじた建てる者たちは、あらゆる罪人の経験の中にそれぞれ対応するものを持っている。悔い改めないなら、それらが予示した滅びはその人自身のものとなる。」各時代の希望, 599, 600.